

## 雑俳化・雑俳的意識について

### はじめに

近代化といえば、封建的な因習・様式などをしりぞけて、物事を科学的・合理的・民主的に行うようにすることであろう。都市化といえば、都市近郊の農村地域にまで人口が流入し、そこで、生活様式や経済活動に変化がおこり、都会的な環境がつくられることであろう。また、大衆化といえば、一般大衆の間に広く行きわたり親しまれるものになることであり、誰もが画的に享受できることから特別なものではなくなることであろう。そして、雑俳化といえば、雑俳の特徴をもつようになることであらう。

この雑俳には、「雑」という文字のイメージの悪さや、ハメ句の横行、バレ句集の刊行、雑俳の一つである三笠付を博奕として禁令発布といった歴史的な一面が特徴として押し付けられ、イメージとしてつきまとっているように感じられる。

そのため、雑俳化というとき、俳諧から生まれた「第二の俳諧文芸」という意味合いよりも、「大衆化」と同一視され、更には「ハメ句・バレ句・賭博」化すると誤解されることが多いのではないか。

雑俳的意識も同様である。

そこで、雑俳化とは、俳諧から分化し、俳諧式目などの制約にとられない新たな楽しみとして、付合それ自体を楽しみ、二句の間の付味や趣向を誇る独立した文芸になることであり、雑俳的意識とは、二句の間の付味や趣向を誇るところに最大の関心事がある文芸意識であることを、あらためて確認したい。

### 一 雑俳の範囲

許六が『俳諧問答』（元禄十（一六九七）年）で蕉門以外の諸流派を一括して「雑俳」と称したことから、雑俳は純正ならざる俳諧という意でとらえられた。その後、蕉門が諸派に分派すると、美濃派によって自派に属さない蕉風俳諧を含んで用いられた。例えば、其角系で淡々、羅人門であった京都の杜口は、『翁草』巻七十八「俳人雑話」（寛政四（一七九二）年序）<sup>2</sup>に、次のように記した。（句読点・傍線・傍点は富田による。以下同じ。）

美濃俳諧・加賀俳諧、洛に入込て専ら蕉門の風行はる。是は正風を宗としてすらりと只事を述る風俗也。是も過れば邪路也。

富田和子\*

彼徒は己が党を結びて他と交る事なく、貞徳は下手などと罵り、世の俳諧は雑俳と嘲る。其心狼戾にして甚陋し。

ここで「是も過れば邪路也」と評された美濃派は俗談平話の平明さに傾き、京都側から田舎蕉門と見下される。その彼らが京都で興行した時、蕉門他派とは交流せず、自派に属さない俳諧を「雑俳」と呼んで嘲ったのである。

このような排他主義に陥りゆとりのない一派から、「雑俳」の語は他を嘲る言葉として使われたという一面は残っていたものの、一方では、次のような進化を遂げた。

それは、「俳諧から出てさらに簡單卑俗を旨とするやうになった諸種の小詩形を総括的に呼ぶ名称」(「雑俳前史」『顯原退蔵著作集』<sup>14)</sup>)、「俳諧が普及の度を高めて広く大衆の間にも享受されるようになった段階で、俳諧を母胎として発足した第二の俳諧文芸の汎称」(宮田正信「雑俳」『日本古典文学大辞典』<sup>1)</sup>)、「俳諧から派出した発句・連句以外の各種雑体の二次的俳諧の総称」(鈴木勝忠「雑俳」『俳文学大辞典』<sup>5)</sup>)など、第二の俳諧文芸の「汎称」「総称」と解説されるように、形式が分化していくのである。

「雑俳」の語がこの第二の俳諧文芸の「総称」の意味で一般に使用され出したのは宝暦・明和(一七五一―一七七二)の浪花俳壇においてであった。例えば、『続耳勝手』(明和三(一七六六)年)「句作心得之事」<sup>6)</sup>に、

近比の雑俳、むかしよりありきたりの前句・折句、又、無題(中略)。小倉・段喙・沓冠・見立付ケなど皆すたれて、今は前句・折句・かさ・場付ケ・五文字、是のミおこなハれる中(下略)

と、時代によって流行はあるものの、「雑俳」の種類を、前句・折句・無題・小倉・段喙・沓冠・見立付・かさ・場付ケ・五文字と列挙する

から、「雑俳」の語は、すでに明和期には第二の俳諧文芸の「総称」としての働きをもっていたことが窺える。

つまり、「雑俳」の語は、はじめ蕉門以外の諸流派を総称した。しかし、都鄙に分裂しながら蕉風が大流行し、俳諧が大衆化して、蕉門を自称するものがふえた。そこで、他方で大流行していた笠付や付合それ自体を楽しむ独立した前句付を俳諧と区別して「雑俳」と総称するようになったものであろう。

しかし、笠付や独立した前句付の大流行後も、蕉風の本流を主張する蕉門の排他主義の鄙側から、自派に属さない俳諧すべてを嘲る際につかわれた。形式よりも、句風の違いに重点をおいた発言である。蕉門においては改革派の都側が「雑俳」と嘲られたわけである。このように、「雑俳」の範囲は、単純に形式では区別できない部分をもっていた。

## 二 雑俳化

宮田氏は先の「雑俳」(『日本古典文学大辞典』)の中で、「雑俳化」を次の二箇所で使用された。(○付数字は富田による。以下同じ。)

前句付俳諧の大衆化は、その雑俳化を招く大きな要因であったが、その勢いを決定づけたのが、元禄六年頃から京都俳壇に雲鼓を中心に動き出した「笠付」と呼ぶ新奇な付合文芸の擡頭である。笠付の流行につれて前句付俳諧の雑俳化は一段と加速した。笠付の成立は同時に雑俳の成立を告げるものであった。かくて元禄七、八年頃から前句付と笠付とを軸に、雑俳の分化と変遷の歴史が始まる。

どちらも前句付俳諧が変化したことに関して使われる。①から、

前句付俳諧が大衆化したことは雑俳化する一要因であって、前句付俳諧の大衆化⇨前句付俳諧の雑俳化であるとは言われていないことが窺える。この「雑俳化」は、由緒正しい俳諧式目から離れ、独立した第二の俳諧文芸に変化したことである。

そして、漸く元禄六年頃から、新趣向の笠付が成立し、俳諧式目から離れた第二の俳諧文芸⇨雑俳が成立した。<sup>②</sup>は、前句付俳諧が俳諧式目から離れ独立した第二の俳諧文芸になることと素直に読める。

どちらも言葉の使い方にはない。つまり、宮田氏は、「雑俳化」とは、由緒正しい俳諧式目から離れ独立した第二の俳諧文芸になることという意味で使われているのである。

また、鈴木氏は「前句付」(『日本古典文学大辞典』<sup>⑦</sup>)の中で、「雑俳化」を次の箇所でされた。

この六句付から五句付となり、元禄(一六八八―一七〇四)に入ると企業化した会所(清書所)による万句合という大規模興行に移行した。高点句を版行して披露するほか、高番の順に景物を添えて大衆の射幸心をあおり、俳諧修行とか文学遊戯から離れた、景品目当ての点取りを目的とすることによって、完全に雑俳化した。

これは、前句付俳諧が「俳諧修行とか文学遊戯から離れた、景品目当ての点取りを目的とすることによって、完全に俳諧式目などの制約から離れ独立した」と理解すべきである。なぜなら、もともと点取俳諧は俳諧の側にあつたものであるからである。点者に作品の評点を乞い、得点の高下を競うのを目的とした遊戯的俳諧であつて、景品が賭け物を伴うのがふつうであつた。次第に景品が豪華なものになるのは、宗匠とは面識のない不特定多数の作者を受入れる大規模

模興行によって、点者側の投吟者獲得競争が激化したのが原因の一つであろう。そして、点取りの目的が景品目当てにかわると、ハメ句の横行をまねき、問題視されるのだが、だからと言ってそれを雑俳の側に押し付けてしまうものではなからう。

雑俳の種類は、付合系の前句付や笠付、折込み系の折句や読み込み、一句立ちした川柳風狂句、廻文など、形式で分類できる。人々は、好みに合わせて形式を分化させ楽しんだ結果、種類が増えた。そこには、企業化した会所による合理的な運営があつた。そこで、「雑俳化」することから、景品目当てであるという視点を第一義におくことを捨て、俳諧式目などの制約から離れ独立して、「雑俳化」することで次々に文学遊戯を発明していったとみるべきである。

### 三 雑俳的意識

鈴木氏は先の「雑俳史」(『俳文学大辞典』)の中で、「雑俳意識」を次の箇所で使用された。

俳諧入門のための練習様式として登場した前句付が、俳諧の一体とは認められながらも、それ自体が目的として行われるようになり、点取競技として大衆の間に広がった元禄期(一六八八―一七〇四)が、江戸雑俳意識の確立期である。

この「雑俳意識」における「雑俳」も、宮田氏と同じく、由緒正しい俳諧式目から離れ独立した第二の俳諧文芸であるとみてよい。そして、鈴木氏は「前句付とその変遷」<sup>⑧</sup>で、次のように述べられた。

もとより、連歌・俳諧の前句付と、雑俳前句付とは、その目的に相違があつて、同一とは考えられないが、貞徳の「淀川」

が『犬筑波』の前句に対して多数の付合を試み、また、一前句に対する百句付・五十句付を実行するところには、付合練習であるとともに、その付合を楽しみ、趣向を他に誇るといふ雑俳的な意識も含まれていたと見るべきであり、貞門直門と京都周辺との間から、雑俳前句付が発生したのも、貞門俳諧前句付の性格によるところが大きいと思われる。

連歌・俳諧における前句付の役割は、当初、百韻や歌仙を巻くことを目的とした付合練習であった。そのため、刷り物にして配布するなどすべきことではなく、貞徳は嫌っていた。それが、次第に前句付を中心とした雑俳興行が盛んに行われ、点取が競技化して、その結果発表として一枚刷や会所本が作られたことは周知のことである。

ここに生まれた雑俳的意識とは、俳諧式目などの制約にとらわれない新たな楽しみとして付合それ自体を楽しみ、二句の間の付味・趣向を誇るところに最大の関心事がある文芸意識である。

これは、宮田氏が述べられるところの「前句付意識」(前句付を俳諧修行のためにするのではなく、前句付の二句の付合それ自體の中に妙趣を見出し、専らこれを楽しもうとする意識)<sup>9)</sup>に近いように思われる。

## 四 第二の俳諧文芸

「雑俳」について、『日本古典文学研究史大辞典』(勉誠社)<sup>10)</sup>の概説で、次のように紹介した。

元禄期に俳諧から分派独立した前句付など、庶民の文芸として愛好される雑体の俳諧文芸の総称。会所による興行で清書巻

の他に勝句刷や賞品をだしたことから大流行した。天明頃、大阪で雑の句(無季題)の意で使われ、全国的に定着した。付合系の前句付や笠付、折込み系の折句や読み込み、一句立ちした川柳風狂句、廻文などがあり、また地域的な呼称で現在も行う名古屋・岐阜の「狂俳」、富山の「舞句」などもある。

ここでは、雑俳を「雑体の俳諧文芸の総称」と述べたが、雑俳化とは、言うまでもなく「総称」になることではなく、「庶民の文芸として愛好される雑体の俳諧文芸」の共通の特徴をもつようになることである。そして、雑俳の仲間に挙げた付合系の前句付や笠付、折込み系の折句や読み込み、一句立ちした川柳風狂句、廻文などに共通する特徴とは何か。それは形式ではないことはあきらかである。

さて、文化九(一八一二)年に大坂で刊行された『冠附虫眼鏡』は、句を並べただけではなく、初心者向けの冠句作法を解説した早い時期の撰集である。そして、これは明治三十六(一九〇三)年に京で刊行された『冠句京の花』でも再録された。その中で次のように、初心者の上達する方法の一つに、多くの良い作品を鑑賞することを挙げて解説する。

一、句作をせんとおもふものは、先、平生に随分、人の句を問、または集本等を見て、句意を味ふべし。板本を見る事、あざけある人もあれども、集冊を見る事、はめ句する為にあらず。題意をしり、句の姿を覚る為也(下略)。

この心得は、現代の名古屋の狂俳や肥後狂句のそれに通じるところが多い。例えば、『狂俳入門』(柳亭兩人編 岩田三友堂刊 一九二一年)の「他人の句を味ふ事」という一条の中で、次のように例句を挙げて解説する。

一日も早く狂俳が上手になろうと思へば、能く古人先輩の句を



読み味はつて、その呼吸を会得してしまはなければなりません。それに就て尚ほ研究して置かなければならぬことは、古人なり先輩なりの句の味ひ方でございます。狂俳は僅かに十二の字数で一句を言ひ現はさねばならぬ為、何かすると只スラ／＼と誦で見たゞけではちよつと判断のでき兼ねるやうな句があります。例へば茲に

▲小鍋立て 炬燵すべった捻戻る

と云ふ句があるとしますと、初心の人には「捻戻る」と云ふ五文字が解り難い。此句の意味は冬の日、待合の四畳半か何かで炬燵を中に芸者と客とが差向で小鍋立をして居たが、何かした機に炬燵に凭せかけてあつた三味線が、いつて其の拍子に絃の捻が戻れたといふ細かい所を見附て詠だ句であります。初心の人には『捻戻る』の捻が三味線の捻であるといふことに氣の附かぬのが多いのでございます。

多くの良い作品を鑑賞することが、初心者が上達する方法の一つであるということは、和歌・俳諧をはじめとして、いかなる文芸・芸能においても同様であろう。俳諧から派生した「第二の俳諧文芸」という成り立ちはどうであれ、それぞれが文芸として独立し、愛好される中で、このように真面目に取り組まれる。

これら「第二の俳諧文芸」に共通する特徴とは、まず、煩瑣な俳諧式目の束縛から自由になり、手軽に樂しめて、人事的な軽い滑稽趣味の中にも、読者をはつとさせるような工夫をみいだせる作品が好まれたということである。そして、独立したことから独自の文芸として真面目に取り組まれるようになった。これら「第二の俳諧文芸」は、俳諧に近代的要求が求められた結果、派生したものと考えられよう。

## まとめ

蕉風俳諧は、いうまでもなく、芭蕉の樹立した芸術性の高い俳風を受け継ぐ俳諧のことである。ここでは、由緒正しい連歌式目に準じて考案された俳諧式目に則り、百韻や歌仙が巻かれた。そして、俳諧自体が「大衆化」して広まったはずなのだが、蕉風俳諧が芸術性を求めたことから、当時流行した文化と融合するようになる。その一例が、芭蕉の手紙や短冊が掛け軸に仕立てられ、句会のみならず、茶会道具（茶掛）として珍重されるようになったことであらう。特に、茶道関係の由緒正しいものは何でも高価になる傾向がある。いわゆる「わび」「さび」を求めた茶道の流行と相俟って、芭蕉関係のものも同様に高価になっていく。

その後、近代化が盛んに叫ばれた明治になって、近代的な短歌や川柳が登場する。俳諧においては、子規を中心とする革新派のみならず、三森幹雄ら旧派も教導職の制度を取り入れて近代化していく。そして、生活詠の多い現代短歌は、和歌と狂歌が融合したものであり、現代の川柳が全国的にもはやされるのも、自由で合理的なイメージがあるからであらう。

江戸時代に「雑俳」という枠でくくられた前句・折句・無題・小倉・段喰・沓冠・見立付・かさ・場付・五文字の類に、明治以後、西洋の芸術論を受け入れた文学用語としての「近代化」に見られる「個人」という意識や、人間が「自然」を征服し支配しようとした対決姿勢は希薄である。そのため、近代化とは無縁のようにみられるが、企業化した会所による合理的な運営は近代的要求の一つであり、短歌や俳句に先駆けて、形式を進化させ改革を試みていたとい

えよう。

顥原氏は先の「雑俳前史」(『顥原退蔵著作集』14)の中で、「俳諧が月花の余情を句に託そうとする際に、前句付や笠付は、人間生活の機微と矛盾とをとらえようとした」と指摘された。とはいえ、誰もが俗談平話の平明さをもつぱらとした排他主義の鄙側の主張を受け入れて、其角や蕪村に代表される都側の俳諧を「雑俳」に入れるものではないであろう。殊に、蕪村の俳諧は人事句を得意とした江戸座風である。その蕪村が「俗を離れて俗を用ゆ」と唱えて、芭蕉の「さび」、「しをり」の世界とは異質の浪漫性の強い艶美な情緒世界をとらえ、高い芸術性を求めたことは周知のことである。

また、先に「一 雑俳の範囲」で引用した『翁草』巻七十八「誹人雑話」には、美濃派の横柄な行動を許すことになった理由を記述する。それは、淡々が考案した「風流なる点格」と拔群の撰によつて京の俳諧を新しい蕉風に導いたが、その弟子竿秋の撰が師を超えられなかったために付け込まれたというものである。

「新しきは俳諧の花也」とは『三冊子』に見られる芭蕉の言葉である。新しい形式の俳諧文芸を生み出していった雑俳の変遷をみると、人間生活の機微と矛盾とをとらえようとした「雑俳」には、都側の俳諧と同様に「改革」の言葉がふさわしいと感じる。

つまり、「雑俳化」とは、俳諧から分化し、俳諧式目などの制約にとられない新たな楽しみとして、付合それ自体を楽しみ、二句の間の付味や趣向を誇る独立した文芸になることであり、雑俳的意識とは、二句の間の付味や趣向を誇ることに最大の関心事がある文芸意識である。そして「雑俳化」は、企業化した会所が仲立ちとなつて、俳諧を合理的・民主的に行おうとしたために勢いづいたものであると考えられる。繰り返すが、付合を楽しみ、趣向を他に誇る

という面こそ、「雑俳化」の特徴である。

雅と俗の間の往還が俳諧の歴史であることは周知のことである。第二の俳諧文芸である雑俳も、それぞれの形式が整うにつれて、雅に向かうし、俗にも向かう。歴史的に褒美や高価な景物を狙うという事象がおこったからといって、それが雑俳化や雑俳意識であると考えるのは、おかしいのである。

## 注

- (1) 宮田正信「雑俳史の研究」(赤尾照文堂 一九七二年) 一四頁
- (2) 『異本翁草』京都大学図書館蔵 一〇・一〇五/オ/一〇
- (3) 顥原退蔵「雑俳前史」『顥原退蔵著作集』14(中央公論社 一九七九年) 五頁
- (4) 宮田正信「雑俳」『日本古典文学大辞典』岩波書店 一九八四年
- (5) 鈴木勝忠「雑俳」『俳文学大辞典』角川書店 一九九五年
- (6) 天理大学付属図書館綿屋文庫蔵。ざ一五三一五
- (7) 鈴木勝忠「前句付」『日本古典文学大辞典』岩波書店 一九八四年
- (8) 鈴木勝忠「前句付とその変遷」『近世俳諧史の基層―蕉風周辺と雑俳』(名古屋大学出版会 一九九二年) 三九六頁
- (9) 宮田正信「付合文藝史の研究」(和泉書院 一九九七年) 四二九頁
- (10) 『日本古典文学研究史大辞典』西沢正史・徳田武編 勉誠社 一九七九年
- (11) 安藤黒竜「続・私の創作ノート」(二〇〇七年)
- (12) 『狂俳入門』(柳亭雨人編 岩田三友堂刊 一九二二年) 一〇頁
- (13) 顥原退蔵「雑俳前史」『顥原退蔵著作集』14(中央公論社 一九七九年) 一八頁